

第 46 回学会大会

シンポジウム

シンポジウム『子どもがいきいきするレクリエーション』
コーディネーター 坂口正治
(日本レジャー・レクリエーション学会副会長・東洋大学教授)

シンポジスト要旨を、以下に、まとめてみます。

☆菅原成臣 (YMCA 高尾の森わくわくビレッジプログラムマネージャー)

「子どものレクリエーションー野外活動の魅力ー」

YMCA は、キリスト教精神を基礎に、参加者の精神も知性も身体も総体として調和をもって成長する、全人的な成長の場（全人教育）としてキャンプを発展させてきた。YMCA のキャンプの手法は大きな特徴があり、参加者（メンバー）は、リーダーと呼ばれるトレーニングを受けた指導者（ボランティアリーダー）と一緒に、グループ（小集団）を基礎として生活・活動し、皆でキャンプ社会を構成して生活を作り上げ、24 時間の生活全てをプログラムにすることである。また、YMCA では、キャンプの目的と方針について「キャンプは全てのキャンパー一人ひとりの全人的な成長、聖書に示された人格の涵養として、その時代と社会に対応しながら運営されていくものである」としている。キャンプの対象によってその意義やねらいは違うが、今日的課題として YMCA の精神を生かした野外活動の魅力を伝えたい。

☆尾木文治郎 (高知県大川村立大川小中学校 校長)

「早寝・早起き・朝ごはん運動の立ち上げとレクリエーションの必要性」

高知県では「はやね、はやおき、朝ごはん運動を平成 9 年度から 10 年間、土佐の教育改革として「子どもたちの基礎学力の定着と学力の向上」「教員の資質・指導力の向上」「学校・家庭・地域の連携による教育力の向上」を中心として高知県全市町村(53 市町村)がこの取り組みを進めた。

そこで、いの町として、学校と家庭、地域が協力連携しながら、子どもたちの体力、運動能力の向上と関心を高めるために、平成 21 年度から「いのっ子生活リズム・体力向上プロジェクト」をスタートさせている。

このような実践から今後も大切にしていきたいこととして、以下の 5 点をあげている。

- ①子どもたちの発育・発達を正しく理解し、これからの幼児教育に幼児体育やレクリエーションの活用が必要であり、子どもたちにとって日々の具体的な取組が大切になる。
 - ②「仲間・時間・空間」(三間)を大切にしたい子ども社会の復活が必要であること。
 - ③子育てのタイミングのよい情報提供と具体的支援を保護者に行うこと。
 - ④幼児期からの生活習慣づくりと運動習慣づくりに取り組み、メディアと上手に付き合うことが、学力の向上・体力の向上・「生きる力」の育成につながる。
 - ⑤子育てについて地域や家庭と学校の連携や相互の協力が必要であること。
- をあげている。

これらの内容についてはシンポジウムのなかで紹介いただきたい。

☆松坂仁美（岡山県 美作大学 教授）

「親子レクリエーションのための運動あそび」

シンポジストの所属する岡山県美作大学で実践している「おかやま子育てカレッジ」美作大学「みまさか子育てカレッジ」の取り組みと、大学の体育館で実践している「親子運動あそび」の実践例についての話題を提供していただく。

ここでは、乳幼児（0～2歳）の親子あそびについて2つの視点から考えている。

第1の視点では、「ふれあい」「スキンシップ」の重要性。

第2の視点では、親が楽しめること。

Play や Recreation から考えると、親も楽しむという視点をもって「親子あそび」を考える必要性がある。

親子が楽しむ一つの契機として、我が子の変化が挙げられる。乳幼児が主体的に動くことの必要性を実践から話題提供をしていただく。

☆吉村真由美（早稲田大学人間総合研究センター研究員・学術博士）

「子どものレクリエーションのための靴教育（シューエデュケーション）」

子どものさまざまな生活場面で活発な身体活動が行われる時、子ども自身の心身の伸びやかな発達に欠かせないと思う。特に野外での活動と靴は切っても切り離せない。日本人特有の靴文化が、成長期の子どもたちの足の健康や安全にネガティブな影響を及ぼしていることの報告がされている。

現在、日本の教育制度の中に靴についての教育はなされていないのが現状である。これらの問題を解決するために、吉村氏が開発した靴教育（シューエデュケーション）と子どもの健康で安全なレクリエーション活動を保証するために、「大人への靴選び教育」、「子どもへの靴の履き方教育」を進めていくべきか、参加者の皆さんと考えていきたい。

子どものレクリエーション —野外活動の魅力—

菅原成臣

〔高尾の森わくわくビレッジ（東京YMCA）
プログラムマネージャー〕

子どもたちにとって自然の中での生活は楽しく、興味と興奮にあふれている。野外活動（キャンプ）は子どもたちの大きな成長の機会である。日常生活では味わうことのできない体験と友人との出会いは、そこに関わる人々の人生の指針になり、将来の礎にさえなっていく。

野外活動（キャンプ）の起源は、野外での共同生活と捉えると旧約聖書にも書かれているとおり紀元前までさかのぼることができるが、私たちが現在行っている教育的・レクリエーション的なキャンプは社会の近代化に伴って、人々の生活が都市化し、青少年の生活、教育環境等が大きく変化してきたことを背景に生まれてきたといえる。

YMCAは、北米YMCAで行われていた **Christian Citizenship Training Program** としての **Four-fold Program**（知的、身体的、精神的、社会的生活を行い、日常生活を豊かにする事業）を始まりに、キャンプの「楽しい」「教育的」といったあり様に注目して、青少年プログラムのひとつとした。以後、キリスト教精神を基礎に、参加者が精神も知性も身体も総体として調和をもって成長する、全人的な成長の場（全人教育）としてキャンプは発展してきた。そして、対象も幼児から小中学生、高校生、青年、成人、家族、障がいをもつ人々へ、季節は夏、秋、冬、春へと広がっていった。

YMCAのキャンプは、手法に大きな特徴があり、参加者（メンバー）は、リーダーと呼ばれるトレーニングを受けた指導者（ボランティアリーダー）と一緒に、グループ（小集団）を基礎として生活・活動し、皆でキャンプ社会を構成して生活を作り上げ、24時間の生活全てをプログラムにする。活動はキャンピング技術、軽スポーツ、音楽、美術など多くの分野にわたり、キャンプ参加者全員のプログラムはダイナミックであり、グループのプログラムは親密さが増していく。また、フリーチョイスや自由時間は個々人の意欲をより高くする。

青少年の野外での活動は数多くあるが、本当に良い成長の機会が与えられるものは、良い理念と良い指導者の下に行なわれるものであり、楽しい生活の中に、ごく自然に成長の機会が用意されているのである。

日本のYMCAでは、キャンプの目的と方針について「キャンプは全てのキャンパー一人ひとりの全人的な成長、聖書に示された人格の涵養を基礎とし、その時代と社会に対応しながら運営されていくものである。」としている。また、YMCAのキャンプはグループ活動を通して民主的な価値を伝えることをも目的としており、①自然の生活に適應する能力を育成する。（生活する力を養う）②良い習慣を育て実践させる。（良い習慣を築く）③健康のための知識と経験を与える。（健康や体力に自信がつく）④生活を豊かにする技術を学び、創造力を育成する。（生活の工夫ができる）⑤良き友人を見出す機会を与え、友情を深める方法を学ばせる。（良い友達を見出す）⑥民主的なグループ経験を通じて、社会にお

ける責任感を養う。(助け合う気持ちや責任感が湧いてくる) ⑦神の恵みを知らしめ、感謝の心を養う。(奉仕の喜びがわかる) という7項目を基本としている。

また、キャンプの対象によってその意義やねらいは違うが、特に幼児の場合は①親の子離れと子どもの親離れができること。②自立を学び自律できるようになること。③言葉にすることができるようになること。④自分たちだけの世界(社会)をつくること。⑤認めあげること。などが主としてあげられる。

さらに、野外活動(キャンプ)はその時代背景と密接な関わりを持っており、今日の高度な科学技術と高速情報化の時代では、ほんの少し前までは想像もできなかったような数々の問題が一つひとつ複雑に絡み合い、しかもものすごく早い速度で事態が推移していることが理解できる。

このような状況において、今日的課題として①豊かな人間関係を作る上で、個々が役割を持ち、他者と共に生きる経験をすることにより、自立や協調する力、人生に対する価値観の確立を図る効果的な場を造る。②私たちがいかに自然に対して大きなダメージを与えているのかを学び、人間も自然の一部であることを理解し、自然を愛して、自然と共存していくための知識・理解を深め、行動に移していく生き方を身に付けていく気づきの場となる環境教育。③身体的に病気や障害のないことが健康であるということだけではなく、自己に与えられた身体を最高の状態に高め用いることであり、精神・社会的側面の健康を加えた全人的な健全度を示すウェルネスの実現。④自然の力、素晴らしさを感じるにより、人間が造り上げた社会の中では気づくことのできない自然への畏怖、それを超え自然を創造した神への畏敬、感謝の気持ちを感じ、自らの素直な気持ちを伝えることにより他者を受け入れ、奉仕と感謝の気持ちを学ぶ機会を得る。といったことがあげられる。

〔シンポジウム〕子どもがいきいきするレクリエーション

早寝・早起き・朝ごはん運動の立ち上げとレクリエーションの必要性

尾木 文治郎

〔高知県吾川郡いの町 いのっ子生活リズム・体力向上プロジェクト推進委員会委員長

高知県土佐郡 大川村立大川小中学校校長〕

keywords : 心を動かす体験, 感動する体験, 意欲, 生活習慣づくり, 運動習慣づくり, 人材づくり

1. はじめに

「recreation」という言葉は、「re=再び」「create=つくる」が合わさった「再びつくる、元気回復」という意味で、「余暇」を利用して、自発的に個人・集団で行う活動や経験であり、ゆとりと楽しみの創造であると大学時代の講義で習った。

レクリエーションとは、楽しさを通して元気や活力を再創造するサイクルライフスタイルである。「子どもとレクリエーション」について、「交流や活動を通して、楽しく感動する体験、心を動かす体験」「人と関わろう、楽しもうという意欲や姿勢、まさしく「生きる力」を育むこと」「子どもたちのよりよい人間関係づくりは、仲間づくり、地域づくり、社会づくりに繋がる」と考える。

2. 早寝・早起き・朝ごはん運動の立ち上げ

1) 高知県「はやね、はやおき、朝ごはん運動」

平成9年度から10年間、土佐の教育改革として「子どもたちの基礎学力の定着と学力の向上」「教員の資質・指導力の向上」「学校・家庭・地域の連携による教育力の向上」を中心として高知県全市町村（53市町村）が取組を進めていた。土佐の教育改革後半、基礎学力の定着と学力の向上には、子どもたちの生活習慣が密接に関わっていることが分かり始めた。

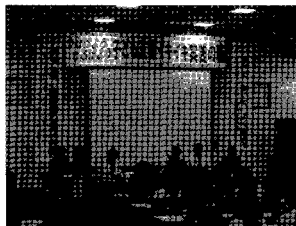
2) 地域でつくろう!! 子ども支援の輪

平成20年度、全国学力・学習状況調査の結果、高知県の学力は46位。全国体力運動能力・運動習慣等調査の結果、高知県の体力は47位。高知県内に激震が走った。いの町の子どもたちの体力運動能力・運動習慣等調査結果も全国平均値や高知県平均値より全般的に大幅に下回った。

そこで、いの町として、学校と家庭、地域が協力連携しながら、子どもたちの体力・運動能力の向上を図ろう、関心を高めていこうと、平成21年度から「いのっ子生活リズム・体力向上プロジェクト」をスタートさせた。

取組の柱	①生活リズム向上戦略の展開	②親子のふれあい体操の普及
	③学校での体力向上推進作戦	④町民意識の向上
具体的な取組	①児童生徒生活実態調査の実施、すこやかキッズカードの活用	
	②生活習慣・体力運動能力向上研修会	
	③運動習慣づくり講習会	
	④キャラバン活動	⑤いのっ子スポーツフェスタの実施
	⑥幼児と中学生のふれあい体操	⑦保育園や幼稚園での実践
	⑧ほけん福祉課との連携	⑨子育て支援センターとの連携
	※⑦、⑧、⑨については平成23年度からの取組	

いのっ子生活リズム・体力向上プロジェクトの取組より



生活リズム結果報告会



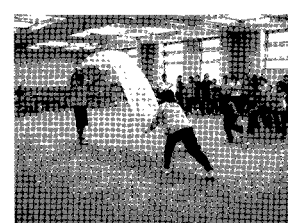
いの町キャラバン



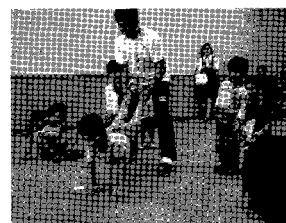
2009 いのっ子スポーツフェスタ



親子ふれあい運動



幼児教育指導者研修会



2011 いの町健康まつり

いのっ子スポーツフェスタ（親子ふれあい運動）

毎年4月29日に、子どもたちに運動あそびに親んでもらおう、子どもたちの体力向上を図ろう、親子で運動の楽しさや運動の仕方を知る機会にしようと開催している。

いの町キャラバン

運動指導（親子ふれあい体操、運動あそび、レクリエーション活動など）講習会などを通じて、子どもたちに有意義な学習の機会をもち、運動を通して、よい汗をかいて、楽しく交流をする機会とする。

運動あそび指導者研修会

子どもたちの健やかな発育発達を支援するために、幼児期からの生活習慣・運動習慣づくりの大切さと具体的な取組について、幼児教育に関わる指導者・関係者等と一緒に考え、学び合う機会とする。

幼児と中学生のふれあい体操

幼児と中学生の心と身体をふれあう機会を通して、互いの力を貸し借りして、感覚づくりや動きづくりができ、自然と体力づくりになっていく。また、お互いを気遣い、思いやる気持ちや優しさが生まれ、人としての信頼を築いていくことができ、よりよい人間関係が育まれていく。やがて地域社会づくりへと繋がっていく。

生徒(2年女子)の感想より

今日、久しぶりに幼稚園の子とふれあいました。私は隣の家の子、みゆなちゃんとやりました。普段は、全然喋らない子なのに、色々話しかけてくれたり、私の名前を読んでくれてうれしかったです。体操では、やる事が多くて大変だったけど、小さい子の笑顔を見てると、凄くかわいくて、心がホッとしました。めんどくさそうな感じもしましたが、凄く楽しく思いました。今日、初めてふれあい体操を感じました。

ふれあい学習（選択教科として）

みんなで楽しく遊べる幼児体育を中学校体育（選択教科時）に取り入れ、これまでの体力向上、技能や競技力向上の保健体育から、よりよい人間関係づくり、身体づくり、思いやりのある楽しい保健体育となり、幼児や小学校低学年児童とも一緒に楽しく、動きづくりや身体づくりができる。

生徒（2年女子）の感想より

幼児体育だけ楽しめました。新聞紙で色々な遊びができるんだと思いました。みんなでボールをつくってドッジボールやサッカー、バレーボールをしました。ボールが痛くなかったので思い切って遊べました。昔やったことがある遊びもありました。そういえば幼稚園の時によくやったなあと思いました。自分の子供にしてあげたいと思いました。

幼児体育ジュニア指導員養成講座

夏季休業中の3日間、1・2年生を対象に18講座を実施。中学生が「子ども本来の生活習慣や生活リズムの大切さ」や「運動遊びの大切さ」を学び、自分の身体や健康、生活リズムについて関心をもつようになった。この講座で、中学生が生活リズムの大切さを学び、知り、考える機会となり、幼児や地域と積極的に関わるきっかけづくりともなった。また、中学生同士が遊び直すことができ、互いの良さに気づき、改めて仲間づくりができた。日本初の幼児体育ジュニアリーダー資格も取得でき、生徒の心の中には貴重な学びや気づきがあったようである。まさに幼児体育から学んだ大切な成果であった。

受講後の生徒（3年男子）の感想より

講義は中学生、実技は5才位の子どもになった気分を受けました。講義では『なるほど。そうなんだ。』と思えることが沢山ありました。例えば、最近の子どもたちは、ゲーム等で室内で遊ぶ子どもが多くなったと思います。外で遊んだり、歩く歩数も少なくなっています。もし、そんな子を見つけたら『外で何かして遊ばんかえ。』と声をかけ、いろいろ学んだことを生かして、外で遊ぶ楽しさなどを教えてあげたいと思います。

生徒会活動（体育委員会）より

生徒会活動で運動習慣づくりの一環として「みんなで遊ぼうキャンペーン」に取り組んだ。

中学生が、保健体育の授業や生徒会活動等で、次代の大人となり親となる中学生が、自分たちで考え取り組んでいくことで、幼児期からの子ども本来の生活習慣づくりと運動習慣づくりの大切さを学び、自らが意欲的に活動することで、社会活動に繋がっていることに気づいた。



手つなぎ鬼



ゴム跳び



ドッジボール

3. 保育園や幼稚園での具体的な取組

高知県民運動「はやね、はやおき、朝ごはん運動」がスタートした頃、高知市社会福祉法人高知福祉協会「ふくし園」（以後、ふくし園）では、平成19年度に、日頃の子どもたちの気になる様子から生活リズム向上の取組が、平成23年度には、いの町立伊野幼稚園PTAが、子どもたちの生活リズム向上の取組が開始され、「生活リズムチェック」や「テレビを消して親子のふれあい」等の取組がされてきた。

取組を進めていくうちに、日中の活動量を上げ、十分な運動量と仲間との運動遊びが、子どもたちがより元気な生活を送るために大切であることに気づき、ふくし園では、年齢に応じた運動あそびの年間カリキュラムと月指導計画を見直し、平成22年度からは、年齢に応じた、発育発達に応じた運動あそびを系統立てて考え、より体を動かして楽しく遊ぶことを目標に取り組みを進め、伊野幼稚園では、参観日や堰堤開放日を活用し、運動の大切さと楽しさを親子で体験することで、家庭でも親子運動あそびができるように取り組みを進めた。

その結果、①登園後イキイキと活動できるようになった。②よく食べよく眠るようになった。③運動経験が豊富になり体力がついた。④歩く・走る・など全体的に身のこなしがしなやかで危なげなくなった。⑤遊びに集中出来るようになり、積極的に外遊びができた。⑥落ち着いて話が聞けるようになった。⑦言葉のやり取りが上手になり、コミュニケーション力がついた。⑧トラブルが少なくなった。⑨我慢ができるようになったなど、子どもたちの生活習慣づくりから運動習慣づくりに取り組むことで、指導者や保護者が子どもたちの生活や運動、コミュニケーション能力の向上につながったことを実感することができた。

4. 成果と今後の課題（幼児体育・レクリエーションへの理解の必要性）

生きる力を育むためには、乳幼児期からの子ども本来の生活習慣づくりと運動習慣づくりが大切だということで「食べて、動いて、よく寝よう！いのっ子」の取組を進めてきた。取組みの中、重要性に気づいた他市町村にも広がり始め、子どもの健やかな成長を育む地域の健康福祉システムを考える市町村や団体、学校等が年々増え広がりをみせている。

これまで子ども支援の取組を進めてきた中で、これからも大切にしていきたいのは、次の5点である。

- ①子どもたちの発育・発達を正しく理解し、これからの幼児教育に幼児体育やレクリエーションの活用が必要であり、子どもたちにとって、日々の具体的な取組が大切になる。
- ②「仲間・時間・空間」（三間）を大切にしたい子ども社会の復活が必要であること。
- ③子育てのタイミングのよい情報提供と具体的な支援を保護者に行うこと。
- ④幼児期からの生活習慣づくりと運動習慣づくりに取り組み、メディアと上手に付き合うことが、学力向上・体力向上、「生きる力」の育成につながること。
- ⑤子育てについて、地域や家庭と学校の連携や相互の協力が必要であること。

次代の人材づくりが、明るく元気で幸せな社会づくりの要であり、地域や日本の未来が託されている。これからも、心も体も元気で健やかな子どもたちを育むために、体育、レジャー・レクリエーションの役割はさらに大きくなっていくと考えられる。

〔シンポジウム〕子どもがいきいきするレクリエーション

親子レクリエーションのための運動あそび

松坂 仁美

(美作大学短期大学部)

近年の少子化や核家族化の進行などの社会的背景の変化の中、子育てに不安や悩みをもつ親の増加や地域社会での子どもを育てる力の低下が指摘されている。

岡山県では、平成 21 年から、大学等有する知的資源、人的資源、施設を活用して行う地域ぐるみの子育て支援の取り組みを、「おかやま子育てカレッジ」として指定している。美作大学は、「みまさか子育てカレッジ」の取り組みとして、子育て支援センターに出向いての「親子ふれあいあそび」の指導や、大学の体育館での「親子で運動あそび」(年間 6 回程度)の取り組みを実践してきた。前者は、大学教員の親子レクリエーションの指導的内容であり、後者は、大学の体育館全体に手づくり遊園地として、環境づくりを学生とともにやり、3 歳未満児とその親が来て自由に遊ぶことができるように、学生と大学教員が支援する活動である。

0 歳～2 歳の乳幼児の親子あそびは、2 つの視点から考えることができる。

第 1 の視点は、「ふれあい」「スキンシップ」の重要性である。乳幼児期の子どもたちにとって、「親子ふれあいあそび」は心身の発達のために欠かせないものである。乳幼児期のスキンシップや身体のだれあいの不足が、第 2 次成長期や成人してからの攻撃性に影響することも指摘されている。「親子ふれあいあそび」は、運動機能の発達や空間認知能力、情緒の安定の獲得を目的として、実践する必要性があると考えている。

第 2 の視点は、親が楽しめることである。子どもと遊ぶことが「気晴らし」となったり、「楽しい」と感じることである。地域の親子クラブの参加にストレスを感じる母親がいるという現状がある。「他の子のようにじっとしてくれない」とか「他の子と比べてうちの子は・・・」と、発達を比較することもあるだろう。Play や Recreation から考えると、親も楽しむという視点をもって「親子あそび」を考える必要性がある。親が楽しむ一つの契機として、わが子の変化が挙げられる。乳幼児の変化を感じてもらうためには、乳幼児が主体的に動くことが必要である。そこで、安全かつ安心して、子ども自らが主体的に動くための空間づくり(結果として、運動機能の発達や認知機能の発達が見込まれる)と、使い方にルールのない手づくりおもちゃ等の環境づくりが重要であると考えている。

今回のシンポジウムでは、後者の視点を中心とした実践についての話題提供を行う。

松坂仁美(まつさか ひとみ)プロフィール

広島大学大学院修了(教育学修士)。1984 年～現在まで、美作大学短期大学部に在籍。現在は、在職のまま、早稲田大学大学院人間科学研究科博士課程に在籍し、前橋 明教授のもとで研究指導を受けている。

教授として、学生指導のみでなく、美作大学附属幼稚園の幼児の体育指導、小学生・幼稚園児の体操教室の指導実践。さらに、大学の子育て支援事業として、0・1・2 歳児の親子で運動あそびを定期的実践している。

[シンポジウム] 子どもがいきいきするレクリエーション

子どものレクリエーションのための靴教育（シューエデュケーション）

吉村真由美

（早稲田大学人間総合研究センター 研究員）

レクリエーションとは、「単なるあそびから、創造的活動までをも含む一連の段階的な広がりをも有するもので、それらの幅広い活動が①レジャーの中で、②自由に選択され、③楽しみそれ自体を目的としてなされる活動・状態としての快迫及と癒しである¹⁾」と定義されている。子どもの様々な生活場面で活発な身体活動が行われる時、その質と量の充実が、子ども自身の心身の伸びやかな発達に欠かせないと考える。特に屋外での活動と靴は切っても切り離せないが、日本人特有の靴文化が、成長期の子どもたちの足の健康や安全にネガティブな影響を及ぼしている²⁾ことが報告されている。

これらの問題を解決するために、筆者が開発したのが靴教育(シューエデュケーション)³⁾である。現在の日本の幼小中高の教育制度の中に靴の教育はなく、子どもたちが靴について教育を受ける機会は整備されていない。本来、成長期にある子どもの靴は、「発達段階に合わせた機能的条件」を充たし、「足の測定値に基づいた正確なサイズ管理」で買い替えられ、「正しい履き方での使用」をされる必要がある。しかし、靴を買い与える保護者が「価格の安さ」や「できるだけ長期間履けること」を重視し、靴メーカーは売れ行きの良い「子どもの喜ぶ流行の靴」や「保護者に人気のスポーツブランドの靴」の製造販売に注力しているため、子どもにとって望ましい靴が買われているとは言い難い実態である。

子どもの健康で安全なレクリエーション活動を保障するために、どのような形で「大人への靴選び教育」、「子どもへの靴の履き方教育」を進めていくべきか、皆様と考え合いたい。

<文献>

- 1) 鈴木秀雄：スポーツ・体育・運動実践考，石川印刷，神奈川，2010。
- 2) 塩之谷 香ほか：不適切な靴が原因と考えられる成長期の下肢障害，靴の医学 22 (2)，pp.83-88，2009。
- 3) 吉村真由美：子どものための靴教育・シューエデュケーション[®]，人間生活工学 14 (2)，pp.19-24，2013。

吉村真由美（よしむらまゆみ）プロフィール

大妻女子大学大学院にて、人体の三次元形状の把握に関する研究に取り組む。平成5年博士（学術）。平成6年金城学院大学に着任。平成18年金城学院大学生活環境学部 教授。子ども靴に関する研究に従事。

科学研究費補助金（平成15-16年度）「子ども靴選択時の意識と機能性に関する認識—日本とドイツの消費者および教育者の比較—」、（平成18-20年度）「子どもの足サイズ計測の必要性—学校保健統計調査で靴によって起こるトラブルを防ぐ—」、（平成21-23年度）「子どもの足の健康を目指した「靴教育」の実践—靴によって起こるトラブルを防ぐ—」。

平成25年より、早稲田大学 人間総合研究センター招聘研究員、早稲田大学非常勤講師など。全国の保育現場・教育現場に介入し、その実態を踏まえた靴教育方法論の研究に専念。また、日本靴医学会評議員、日本靴医学会小児の足と靴を考える委員会委員、(公財)日本学校体育研究連合足育調査研究委員会委員、足育推進委員会委員として、日本の靴文化の構築と、靴教育（シューエデュケーション[®]）の義務教育化・一般化に取り組む。

